

20周年を迎えた米国WSF

WSFジャパン・スタッフライター 山本 尚子

米国のWSF（女性スポーツ財団）は20周年記念総会をこの五月に開催しました。その着実な歩みは、私たちのお手本でもあります。

プロテニススのピリー・ジーン・キングがスポーツ界の男女平等を実現するため、WSF（女性スポーツ財団）を創設して今年で20年。今回は五月に行われた20周年記念総会（ワシントンDC）の様子をお伝えしましょう。（なお原文は七月二日付日本経済新聞夕刊に掲載されたものです）



▲「12-14歳の少女の指導について考える」セッション風景

賞金の男女差解消

ワシントンのホテルの会議場に、小麦色に日焼けした女性たちが吸い込まれていく。引き締まった体躯（たいく）キビキビした物腰。スポーツ界における女性の地位向上を目指す団体、WSFの二十周年記念総会に集まった選手やスポーツ関係者たちだ。

「次の世代のためにー我々の娘たちのためにスポーツとフィットネスの未来をデザインする」。こんなテーマを掲げた総会をリードする同財団会長は、ロサンゼルス五輪競泳金メダリストのナンシー・ホグシエットさん。参加者の中には、元オリンピック・ボート選手で国際オリンピック委員会（IOC）の米国選出委員でもあるアニタ・デフランツさんもいた。二人しかいない米国人IOC委員の一人に、女性でしかも非白人の彼女が選ばれていること自体、この財団が過去二十年間に果たした役割の大きさを物語っている。

一九七四年、世界を制覇したテニスプレーヤー、キング夫人の提唱で、この財団が誕生した当時、米国のスポーツウーマンを取り巻く環境は、お世辞にも進んでいるとは言いがたかった。

例えばプロテニススの賞金額は、同じ大会でありながら男性と女性とはか

なり差があった。女子選手の体の微妙な問題に対する男性指導者の理解も乏しかったし、何よりも女性に門戸を閉ざす種目が少なくなかった。

こうした状況を改めようと啓発活動に乗り出したWSFは、アマ・プロの選手やコーチ、スポーツ心理学やスポーツ医学などの研究者、競技団体関係者などを数多く結集。男性に後れをとっていた女性の地位を大きく引き上げることにも力を貸した。

今では全米オープンテニスのように男女の賞金が同額の試合が行われるようになったり、女子選手ご法度の種目も次々消滅。八四年のロサンゼルス五輪からは女子マラソンが始まり、九二年のバルセロナ五輪では、女子柔道も正式種目に格上げされた。

「門戸開放」にも力

この柔道への女性の参加については、WSFが私たちWSFジャパンなどと協力して世界各国の柔道関係者にアンケート調査を行ったことも、門戸開放を促す大きな材料になった。

今後のオリンピックについても、九六年のアトランタ大会では女子サッカー

が、九八年の長野・冬季大会では女子アイスホッケーが正式種目に決定。二〇〇〇年のシドニー大会では女子レスリングの参加が取りざたされている。このように、情報サービスや会議・セミナーなどを通じて女性スポーツに対する社会の理解を求めると同時に、米国の女子スポーツ界への貢献者の表彰も種々実施している。

こうした成果を踏まえ、今回の総会で男性も交えて話し合われたのは、先にも挙げた通り、次世代のために何をすべきか。まず、自分たちの経験から反省すべき点、推進すべき個所を整理し、少女たちの指導について発達段階別に議論。実際にテニスプレーヤーを娘に持つ母親が登場して、肉体的、精神的な発達状況に反した練習の強制がいかに弊害をもたらすかなどを、生々



▲IOC委員アニタ・デフランツさんと

しく語ったりした。

次いで、選手やコーチ、さらには医師、弁護士、メディア、組織など九セッションに分かれての分科会。ここでは企業が女性スポーツを支援する意義、メディアの果たす役割など幅広い視点から活発な意見が交わされた。

体は自分で管理

これらの議論を通じて何よりも痛感したのは、次世代のことにまで思いをめぐらすことのできる米国の余裕だ。WSFジャパンがボランティア団体として生まれたのは、本家に遅れること七年後のことだが、日本スポーツ界の実態は二十年遅れといった方が近い。

いまだに女子選手の多くが男性コーチの管理下、言われるがままに練習している状況。自分の頭で考え、自分の体を自らコントロールしようという気概に乏しく、啓発活動の必要性さえ感じていない人が多い。

そこでまかり通っているのは、相も変わらぬ精神主義だ。

「生理で具合が悪いのは気持ち悪がたるんでいるから」などという暴言が横行し、教え子の生理日を無視して指導するコーチが少なくない。こうした環境では、次世代に何を伝えるかなど、とても頭が回らないのが実情だろう。

最近、WSFジャパンの会合で講演した元マラソン選手の増田明美さんはロス五輪での棄権前後の苦しかった時

期を振り返りながら、「もっと自分意思をもって走ればよかった」と述懐していた。

運きに失した感があるものの、こうして目覚めた女性を多数輩出してこそ、日本のスポーツ界も成熟していくのだろう。そして、その時こそ、このたびのWSF総会を締めくくったスローガン「女性はスポーツを欲しており、スポーツも女性を必要としている」の言葉が生きてくるのだと思う。

◆ホットニュース◆

米国WSFの恒例行事「アウォード・ディナー」が十月十七日、ニューヨークのウォールドーフ・アストリアホテルで盛大に開かれた。これは年に一度、女性スポーツにおいて顕著な活躍をした人々への表彰を兼ねて行われるレセプションである。今回、国際女性スポーツの殿堂入りしたのは次の3人。

◎バイオニア部門 リズ・ハーテル

(デンマーク・乗馬)

◎コンテンポラリー部門 紀政

(台湾・陸上)

◎コーチ部門 ラスティ・カノコギ

(米国・柔道)

ラスティ・カノコギは、本紙でも何度か紹介しているが、女子柔道の第一回世界選手権を独力で開催し、五輪種目にするために尽力をした立役者である。女子柔道の母ともいえる、彼女の受賞スピーチを、ここに紹介したい。

◆
▲教え子に囲まれるラスティ



まず、WSFと私を長い間、支えてくれた家族、友人、スポンサーに感謝いたします。

私はニューヨークのブルックリン出身です。私のたどってきた道は決して平坦なものではありませんでした。しかし私の選択は間違っていないかったのだと信じています。有り余るエネルギーを持ってあまし路上にたむろしていた子供時代。そのエネルギーは幸運にも高校でスポーツに向けて発散することができるようになったのでした。

いまの若い選手は、WSFのサポートがあるお陰でとても恵まれていると思います。若い選手たちは先人が経てきた苦勞を忘れないでほしい、そして私たちはこれからも女性スポーツのため前向きに歩み続けて行かねばなりません。

指導の仕事は今の私にとって、とても大きなウェイトを占めています。勝つためだけでなく、女子選手の心の内まで配慮しながら、選手の最大限の可能性を引き出す手助けをしたいと思っています。

かつて女子柔道選手はメダルを獲得しても全く相手にされませんでした。それでも辛抱できたのは、「私たちは勝利者だ」という自負があったからです。しかし実際に私たちがコーチをするということは、選手の指導以上の意味を持つていました。練習着すらなく、資金集めから始めなければならなかったのです。

「ラスティ、私はたくさんのバッジとピンを持っているからそれを溶かして車にしたら」などと友人にいわれながらも、ようやく女子柔道のための資金調達をすることができました。それにもかかわらず、マスコミの私への呼称は「ラスティ・カノコギ、ブルックリン出身の主婦」でした。でも、この「主婦」は決して独りぼっちではありませんでした。

私にはリー・クラスナー(ジャクソン・ポロック夫人)という、有名な画家であるおばがいました。彼女は長いこと、その才能を正しく評価してもらえませんでした。おそらく彼女も私と同じく、変化を嫌う世の中で、何かを変えようとしていた強い女性だったのでしょう。何度も私たちは嘆いたものでした。「世間は私たちを受け入れてくれないのよ」。

リーおばさん、ようやく受け入れてもらえましたよ。
本当にありがとうございます。